
担ぎ営業

馬路キレ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

担ぎ営業

【Nコード】

N5221D

【作者名】

馬路キレ子

【あらすじ】

大都会に少ないサラリーで必死に働く営業マン。上司に言われた口説きのテクで難攻不落の会社を落とす。

（前書き）

この物語はフィクションです。

実際に存在する団体名、役職名などは一切関係ありません。
描写に関してあえて端折ってる部分がありますが
そこは想像で保管してください。

昔から日本人というのは縁起を担ぐのが好きです。

何かって言うと語呂あわせて、何か大事な勝負事の時には

『とんかつ』を食べれば『敵^{テキ}に勝つ（カツ）』

めでたい日には『おめで鯛^{たい}』

おせち料理なんかには黒豆なんか添えて『マメに働く』なんて

ちよつとばかり洒落の聞いた語呂や、面白い掛け言葉が大好きです。

…今回は、そんな言葉のお話。

ここはとある大都会。

商社の高層ビルがひしめき合って立ち並ぶ、街の大通りの真っ只中に、

ひととき高くそびえたつ、老舗の呉服屋の自社ビルがありました。

その商社の前で、人波にまぎれてポツンと一人立つ男がおりました。男は色あせた薄手の紺色のビジネススーツを着て、朝丁寧に剃ってきたばかりで若干ヒリヒリとするアゴを触りながら、ボヤボヤと呪文のように何かをつぶやいています。

「よし！今度こそ決めるぞ！部長からもアドバイスを受けたし！やるぞ！」

その威勢は良かったのですが、男の顔面にはうつすらと油汗が浮き出てました。

デパートの出展に関する商社で営業係長を務めるこの男が、目の前に立つ老舗の呉服屋の高層ビルの営業に来て42回目。

何度となく商談を断られ続けられた理由はただ一つ。

それは商談の良し悪しではなく、ここの老舗呉服屋の主人が異常なほど、縁起を担ぐ人だったからです。

その主人は商売は上手いほうなのですが、良い縁起も担げばなんせ悪い縁起も担ぎます。

「北向きに立てられたデパートへの出展は釈迦が安置された方向だから駄目」

「朝出かけるときに目の前に黒猫が横切って不吉だから、この商談は駄目」

「日常プライベートに使う下駄の鼻緒が切れれば不吉だから面会しない」

そんなむちゃくちゃは当たり前、うまく運んでいる話し合いでもうっかり不吉な事を言えば、その場で不機嫌になり話しを駄目にしています。

まあ男からすれば、しつこい営業の『ていのいい』門前払いとも言えますが…。

「はぁ・・・」

こんな変わり者を相手に何十回も失敗している男は上司から助言を得たようですが、内心は不安で一杯です。

30分後、ビルの中に入って、応接室へ招かれた男は初老の呉服屋の主人と面会すると、一礼をしてついに商談が始まりました。

「おう、若いの。この前はすまなかったね」

「こちらこそ、大変申し訳ありませんでした」

「まあ今日は時間もあることだし『じつくり』と話し合いをしようじゃないか」

「それでは早速商談に・・・」

「いやいや、まずは世の中の話しをしよう」

「は、はい・・・」

早速商談は出鼻をくじかれ、ありていな世間話から始まり主人の顔を伺いながらですが、まあまあ緩々と進んでいきました。主人の話しは尽きないもので、いつのまにか昼も過ぎ、夕方ともなる時間。

流石に商談を斬りこまねばと、男は主人に言いました。

「そろそろお時間もお時間なので、商売のお話しのほうを・・・」

「お、そうかい。まだまだ話せるとおもうんだが。しょうがない。ところで今何時だい？」

男が据え置きの時計を見る。

『4時2分』・・・ジーザス！なんとという縁起が悪い不吉な時間だ！しかし男は、上司に言われた助言を思い出し、あからさまに狙ってるとしか思えない主人に向かってこう言った。

「四つ時の二つ目です」

「おお！…不吉な読み方を避けられたか」

そついうと主人は上機嫌になり、秘書に命令して男に玉露の茶を出した。

今まで出されていた下卑た粉末茶とは違い、舌触り、風味、どれをとつても極上のお茶であつた。

その待遇を見て、まだ切り込めると思つた男は、主人に向かつてこういつた。

「このお茶、相当の代物ですなあ……」

「おお若いのもわかるかい？ 京都の高級茶屋でよく使う最高の玉露だよ」

「飲んでみると、こう、天にも『昇るほど』気分が『上がつて』きますな」

「はつはつは、天にも昇つて気分も上がる。全て上々なんて縁起を『担ぐ』じゃないか」

男の言葉に気分を良くした主人は、さらに笑顔を浮かべる。

男はそれを見て「イケる」と思つて、上司に言われた事を思い出し、まるで酒に酔つたように座つたソファで少しからだを揺らした。

「素人にもわかる体を揺するほど、五臓六腑にすえひろがる上々のお味ですなあ」

「はつはつは！ 『染み渡る』ではなく『末広がる』ときたか！ これは、ますます縁起を担ぐのうー！」

「この揺れ、まるで宝船に乗つたようです」

「ほほう？ 宝船とな」

「はい、七福神の乗つた宝船、このような茶を出す御社も宝船でこ

「ざいましょう」

「そうかそうか、元来宝船は七福神を乗せ、正月を迎える時に現れるという縁起の良い船の事、うーむこれはますます気分が良い！」

呉服屋の主人は男の言葉にこれでもかとお機嫌。

そこで、面白がったついでに男に、こんなことを言った。

「この会社が宝船だとすると、七福神がいるのかね？」
「いますとも」

「ほう、どこに？」

「それはもちろん、私の目の前に居るニコニコとしている社長が大黒様で、あそこで、末広がるお茶を注ぐ秘書さんが弁天様。これで七福神が揃いました」

「…え？」

男の発言に上機嫌だった呉服屋の主人も、流石にこれは理解できず思わず男に尋ねた。

「まだ二福神じゃないか。残りはどうした」

そういうと、男は含むようにこう言った。

「こちらのご商売が呉服（五福）でございます」

呉服屋の主人は韻の見事さにつんのめって笑いながら、

ついに無事商談は成立し、この『かつぎ営業』も成功したのである。

（後書き）

というわけで、相変わらず失敗気味のやつつけ仕事なわけですが今回やりたかったのは古典落語の『かつぎや』の現代語版です。この話しは落語の中でも前々から好きで、縁起を担ぐ呉服屋と新年の宝船の札を売りにきたいなせな若い衆との会話が面白い落語です。

今回かいてて思ったのは、やっぱり古典落語を現代設定に直す作業というか

そこまで移行させることの難しさでしょうね。

しかし、語呂やなんかで、こんなに縁起を担ぐ種族ってのは日本人くらいなんだろうなあと思始した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5221d/>

担ぎ営業

2010年10月15日21時24分発行